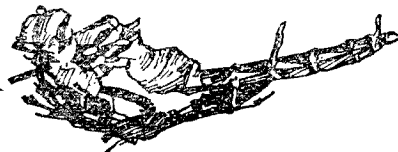
珍奇な冬蟲夏草こ蜘蛛

奥　村　定　一

東京都目黒區中目黒4丁目1271

古來支那で冬蟲夏草と稱せられていたものは蛾類の幼蟲に寄生するCordyceps sinensis Soce の菌であるが，是等菌・蟲の兩部分を乾燥して酒に浸し，水に煎じ或は肉と共に食うと肺，腎臓の妙薬となり強壯剤としては人蔘にも劣らずとまで稱揚せられ，或は黄疸・阿片中毒にも効ありと云われたものである。尙臺灣では是を媚藥として愛用すると云う。本邦に於ては夙くから不老長壽の靈藥，貴重なものとして使用せられた。尙此の他ミミカキタケ C. nutans Pot. はイブキカメムシ，ハラビロカメムシ，クロスジカメムシ其の他のカメムシ類の蟲体に寄生する。別名カメムシタケとも稱せられ，江戸時代，小原桃洞"桃洞遺筆"中に夏蟲冬草と稱せられている。尙セミタケ，ハチヤドリタケ，サナギタケ，アリタケ，クモタケ等の類がある。

閑話休題。前置は此の位にしてこゝに云う珍奇な冬蟲夏草とはトンボの自然敵，蜻蛉体に寄生するトンボタケの謂である。菌体は極めて小形で容易に目につき難いので熟練した採集家でなければ是を得ることは困難である。此の資料は濱松市在住の齋藤徧理氏によつて昭和11年(1936) 4月16日遠江國光明山中の杉林の小枝にかゝつていた蜘蛛の巣から採集せられた。此の菌はナツアカネ Sympetrum darwinianum Selys ♀の体節，殊に腹部關節から2－6mmの細い柱狀の菌体5本を出している。當時氏の私信からその環境を「地上約1米50。何所の山にもある岩のごろごろしたありふれた澤。澤にはイタドリが密生していた。快晴風强し。蜘蛛の種類は殘念ながら判りませんがその絲は非常に粘つたところから見るとジョロウグモの類ではありませんか」と。當時の同地方の氣象觀測成績は次の通りであつた。

下部の黒影は枯葉片　奥村描く

昭和11年	雲　量	降水量	最低氣溫	最高氣溫	氣　溫
4月1日	7		1.0	14.0	12.1
2	10	37.5	4.5	12.5	11.5
3	10	5.0	7.0	15.0	12.5

4	10		4.0	13.5	8.2
5	0		3.5	18.0	10.5
6	1		5.5	21.6	7.0
7	5		10.6	23.6	19.2
8	10	31.5	11.1	20.0	15.1
9	10	5.1	14.4	20.0	16.1
10	10		8.1	15.1	15.1
11	10	79.0	6.6	12.6	10.0
12	10		8.0	13.7	11.2
13	10	16.3	10.3	16.0	13.3
14	0		8.0	19.5	14.5
15	10	1.1	6.5	17.0	15.1
16	1		7.5	19.0	16.2

二俣測候所の觀測に依る。同地は光明山から1里にも至らず氣象條件も變りない。

本種の學術上の記載は斯界の權威小林義雄博士により昭和16年 (1941) 4 月, The Genus Cordyceps and its Allies の標題の下に昭和 8 年 (1933) 8 月土佐國高岡郡斑入山 (大山) にて本菌の寄生を受けたミルンヤンマ Planaeschna milnei Selys を採集され Hymenostilbe odonatae Y. Kobayasi として発表なさつた〔Science Reports of the Tokyo Bunrika Daigaku, Sect. B, Vol. 5, No. 84, pp. 53-260〕。併しその生態は尙不明である。

本稿のは第25番目のものであり且つ蜘蛛の巢にかゝつた例として注目に値する。此の貴重な資料は採集者齋藤氏から田中亮三氏を通じ矢野宗幹先生が閲覽せられその後御配慮によつて筆者に屆けられた。それからかなりの空白の日時を經て頃日小林博士の同定を頂いたがその節同氏は和名ヤンマタケはトンボタケと改稱する方が適切であると申されたのを附加えて置く。採集者齋藤氏, 御厚配を賜わつた矢野先生, 田中氏, 同定を賜わつた小林博士等に深甚な謝意を捧げる。

最後に蜘蛛の巢にかゝつたトンボなりとも仇やおろそかになしそと擱筆する次第である。